

TOEIC® スピーキングテスト/ライティングテスト

活用レポート **学校編**

宮崎公立大学

宮崎公立大学では選択科目「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」にTOEICスピーキングテスト/ライティングテスト(以下TOEIC SWテスト)を導入し、能力測定などに活用しています。同学における英語教育、その中でのスピーチ指導への取り組み、TOEIC SWテストの実施について、学長 中別府 温和先生、学部長 中山本文先生、そして「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」の指導にあたる竹野茂先生にお話を伺いました。

—— 貴学における英語教育の位置づけについて教えてください。

中別府先生: 本学は、リベラル・アーツ・ユニバーシティーとして、広い視野と豊かな人間性を備えた人材の育成に取り組んでいます。人文学部国際文化学科の一学部一学科を設けており、“humanities”、つまり“自律的な人間らしい生き方”、“人間理解”の視点を大切にしながら教育を行っています。人間理解には、政治、社会、文化など人に関わるすべてが含まれるわけですが、これらを理解し、考えていく根底には言葉が必要となってきます。特に国際的な視野に立った人間理解には英語力が欠かせません。そのため本学では言葉の教育を重視しており、まず母国語である日本語、それから国際言語としての英語教育に力を入れています。教育目標の一つには英語の高度運用能力の養成を掲げています。

—— その目標に向け、どのような英語教育を行っているのでしょうか。

中山学部長: “鉄は熱いうちに打て”という考えの下、学習モチベーションが高い1年次に英語を集中的に学ばせる早期集中型学習を取り入れています。週の授業数は前期5コマ、後期4コマあり、一人ひとりの意欲と習熟度による1クラス25~30人の少人数クラス編成で英語の基礎力を養っています。授業では課題もたくさん出しており、自主学習も含めると1年次は相当数の時間を



学長

中別府温和先生

英語に費やすことになります。

英語の必修科目は1年次だけとし、2年次以降は中級・上級の英語の選択科目や、講義全体を英語で行う専門教育科目も用意しています。そうして“相手の主張を理解し、自分の意見を正確に伝え、議論や交渉、契約書の取り交わしができる能力”を習得できるようサポートしています。

—— TOEIC SWテストは選択科目「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」において導入されています。この科目内容について教えてください。

竹野先生: 「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」は、選択科目「英語科音声指導法Ⅰ・Ⅱ」を受講した学生を対象に開いている英語教員免許取得のための必修科目の一つです。修了後は「英語科ディベート指導法」へと進み、3年間を一つのスパンとして実践的に英語の指導法を学ぶ構成と



人文学部国際文化学科
学部長・教授

中山本文先生

しています。

これらの科目では、訓練的要素を取り入れた授業によって、英語の指導法だけでなく、自己表現力や国際的に通用する説明能力を身につけさせることを目指しています。

「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」では、事前に与えたテーマに基づき、グループ内で互いに発表をさせているのですが、そこでは必ずスピーカーに質問することを課して、相手の主張を聞き、他人に誤解を与えない質問を作り出したり、また提示された質問に対して過不足なく説明できる力を段階的に高めていくように取り組んでいます。

—— そうした授業を行う中で、TOEIC SWテストを導入された理由を教えてください。

竹野先生：「英語科スピーチ指導法Ⅰ・Ⅱ」ではスピーチライティングとスピーチのパフォーマンスの習得を目指すカリキュラムを編成しています。その能力を評価するには、どうしても私個人の判断部分が大きくなってしまいます。そのため、客観的に能力を把握できる指標の必要性を感じており、TOEICスピーキングテストは、クイックレスポンスをはじめ本授業で伸ばしたいと思っている能力と重なる部分が多いことから導入しました。

2007年度は受験料全額個人負担で受験を奨励していましたが、今年度からは受験料の一部を大学が負担し、年間に1度の受験を義務づけています。

中別府学長：本学では学生の主体性と自律性の養成を重視しており、授業や学内行事などにおいてこの力を



人文学部国際文化学科
准教授

竹野茂先生

養うような取り組みをしています。資格試験の受験料の一部負担は、その一環として、自発的な学習の支援、就職支援のために行っているものです。TOEIC SWテストは今年度より支援を開始しましたが、TOEICの公開テストでは以前から行っており、IPテストと合わせ、毎年多くの学生が受験しています。

—— 最後に、TOEIC SWテストの今後の活用について教えてください。

竹野先生：前期修了前の7月は、約60人いる受講生のうち48人が団体一括受験申込を利用してTOEIC SW公開テストを受験しました。学生からは受験前、「受けるのが楽しみだ」という意見が多く聞かれ、テストを前向きに捉えてくれていたのが印象的でした。

スピーチというと大勢の前で発表することと考えがちですが、日常会話もディベートもスピーチの連続で成り立っています。質問に対して、一言で返事をしては会話になりません。相手に対し何をどういう順序で、どこまで説明しなければならないのか。それをTOEICスピーキングテストの受験を通して、学生が学んでくれることを期待しています。また、TOEICライティングテストでは、スピーチの原稿づくりに必要な説得性を持たせるために、どう話を展開したらいいのか、などのライティングの要素を学んでもらいたいと思います。今後は後期修了後にもTOEIC SWテストを実施し、進捗を測ることを検討しています。

<2008年8月取材>